

1900年に海外雄飛の人材育成を目的に設立、桂太郎や後藤新平が歴代総長をつとめて――

# 「建学の精神をふまえ、世界のあらゆる民族や人種との共存を担う真の国際人を育成したい」

国際大学の伝統と使命を――。「教育体系の再構築をし、伝統ある大学としてのポジションを復活させたい」と語るのは、拓殖大学理事長の福田勝幸氏。拓殖大学では、都心回帰の流れを受け、文京キャンパスと八王子キャンパスの再編成に乗り出すなど、教育体系の再構築を進めている。理事長就任から1年、福田氏が掲げるこれからの人材育成のあり方とは。

拓殖大学理事長

## 福田 勝幸

Fukuda Katsuyuki

### キャンパスの再編成は第3ステージに突入

――福田さんが学校法人拓殖大学の理事長に就任して1年が経ちましたが、改めて、この1年をどう振り返りますか。

**福田** 昨年は東日本大震災という未曾有の大震災に直面し、大学の使命とは何なのかを改めて考える1年となりました。そういう時期に理事長を拝命いたしました。明るい社会を作り上げる原動力となるような、若い有能な人材づくりが大学の使命だと強く感じております。

拓殖大学はわたしの母校でもありますし、現状と将来の展望については、もともと、わたしなりにずっと考えていたことがありました。それは文京キャンパスと八王子キャンパスの再編成、それから本学の建学の目的であるグローバル人材の育成、そして元気のいい学生を育む、この三つを実現しようということです。

その根本にあるのは、本学が1900年（明治33年）に建学

された当時というのは、まだ私立大学というのが全国でもせいぜい20校あるかないかの頃でした。そういう時に開学した伝統ある大学としての本来のポジションをもう一度復活させたいという思いがあります。

――なるほど。その中で、まずはキャンパスの再編成に取り組む意義は何ですか。

**福田** やはり今まで拓殖大学というのは、文京キャンパスがある東京・茗荷谷が本部だというイメージがありました。ところが、1977年に自然に囲まれた広大な同・八王子キャンパスができてから35年が経ちまして、ややもすると、世間のイメージが拓大は八王子にあるのではないかと思われる人も多くなってきました。

同時に郊外に進出していった大学の都心回帰が叫ばれるようにもなりました。確かに、キャンパスが分断されると教育的効果が阻害される面が出てきたり、埼玉や千葉、神奈川県から通う学生が非常に苦勞する姿も目立つ



できました。そこで2000年頃から、当時の藤渡辰信かじとらのみね総長と共に、新しい時代のキャンパスはどうあるべきか。キャンパスの再編成を進めてきました。いま第3ステージに入りました。

**教育環境づくりをバックアップすることが経営者の役割**

—— 具体的には、どういう再編成になりますか。

**福田** 文京キャンパスは約2

万平方メートルの敷地がありますが、現在の基準ではその面積の約2・4倍の建物が建築可能です。例えば、現在、八王子と文京に1、2年生と3、4年生が分かれて学んでいる商学部と政経学部については、できるだけ多くの学生が文京キャンパスで4年間通して密度濃く学べるようになります。就職活動の開始時期が年々早まる中で、実質的な学びの間を考慮すると、1年生から4

ふくだ・かつゆき

1944年青森県生まれ。67年拓殖大学商学部卒業。79年学生主事、93年学務部長、98年総務部長、2001年事務局長、03年常務理事。11年6月より理事長に就任。

年生まで同じキャンパスで一貫教育を行う方が、学びの中身も充実します。

—— 同時に、八王子キャンパスの位置付けはどう考えていますか。

**福田** いま八王子キャンパスには7000人くらいの学生がいるんですが、一つは都心ではなかなかできない工学部でモノづくりの研究を更に高めていこうと考えています。

そして、わたしが最も重要だと考えているのが、留学生や地方からの学生のための学生寮の建設です。八王子キャンパスには国際学部と外国語学部があるということ、いずれは工学部も留学生を増やして、キャンパス内に寮を完備したアメリカやヨーロッパの大学のような国際的なキャンパスにしたいと思っています。

欧米の大学のように、緑多いキャンパスの中で寮生活をして、図書館でゆつくり勉強をし、そして課外活動も行うことができ、そういう授業プラス課外活

動で集団的な訓練をしながら人間形成をする。そういう良さを前面に出したいと思います。

—— 文京、八王子キャンパス共に特色を出していこうということですね。改めて、いま少子化が進み、大学経営も学生の確保に苦労していると聞きます。その辺の学生確保については、どう考えていけばいいですか。

**福田** やはり、学生の確保を考えるには、まず大学自体に魅力が無いといけません。

そこをどうやって磨いていくかだと思んですが、これから日本は内向きではなく、海外とのビジネス展開を積極的に行う時代になってきます。こういうところに企業は活路を見出しているわけですから、国内だけで就職を決めようということだけではなく、どんどん海外へ出て行って仕事をしようと考えられるような学生を育成する。それしかないと思います。

例えば、国際学部では1学年300人くらいの学生がいますが、この学生を中国や韓国だけ

でなく、マレーシアやベトナム、タイ、インドネシアなどの東南アジアに留学させようと考えています。

先ほど、留学生を増やすために寮を完備するというお話をしましたが、留学生と触れあうことももちろん重要なことですが、一方で、こちらから海外に出て行って、現地の風土や習慣を学んでくることも非常に重要なことだと考えております。

—— そのためのキャンパス再編成であり、カリキュラムの再構築というわけですね。

**福田** そうなんです。商学部と政経学部は3年後の平成27年度から、文京キャンパスで1年生から4年生までが一緒に学べるようになります。

大学教育というのは通信教育とは違って、単にキャンパスの中で授業を受けるだけではなく、クラブ活動やサークル活動を通じて、先輩の背中を見ながら社会の構成員としての自分を見つけていく場所です。

そうして考えていくと、やは



り、教育の環境づくりをバックアップするのが経営者の役割ですから、1年生から4年生まで一緒に勉強できる場所の再整備というものが必要になってくると思います。

## 現地の風土にあった人材を日本から送る！

—— さて、福田さんは常務理事の時代から『拓殖大学 百年史』の編さんもずっとやってこられたわけですから、この112年の重みというか伝統を感じましたか。

**福田** 2000年に創立10

1900年の建学当初から、拓殖大学では国際人、今でいうグローバル人材の育成に注力してきました。企業の海外進出が加速している今ほど、その建学の精神が求められている時はありません。今後も海外の人と現地の言葉でコミュニケーションができるような、真の国際人の育成を目指していきます。

0周年の式典を行った時に、この100年の歴史をしつかり検証して、本来の拓殖大学の姿というのがどんなものか、しっかりと検証した方がいいということになりました。今まで漠としてあったイメージではなくて、本来の形を検証しよう。それは非常に意味のあるものでした。

—— 拓殖大学は桂太郎公爵（元首相）の手により、台湾協会学校として台湾開発のために貢献しうる人材の育成を目標に創立されました。つまり、海外で活躍する人材の育成を図ってきたという歴史がありますね。

**福田** はい。明治維新になって、日本が富国強兵で近代化して、日清戦争の前まではフロンティア、いわゆる北海道の開拓なんですけど、日清戦争の勝利で日本が始めて海外の土地を領有したと。そのフロンティアが台湾という外地だったんです。

最初に台湾の受け入れでリーダーシップを取ったのは伊藤博文（初代首相）でした。国会の

中に台湾事務局というのをくって、そのトップが伊藤博文だったのです。

伊藤博文は、日本が西洋に伍して「台湾」で外地経営のできる能力を示そうとした。もう一つは、西洋、ヨーロッパの植民地とは違う、日本の国土になったので、日本の国民と同じような幸せを台湾の人々に持つてもらえるようにしたい。そういう政策を推進したというのが、伊藤博文です。

明治元年から考えるとわずか30年たらずですが、その間に日本が作りあげた近代化、あるいは日本の本来持っている勤勉さ、そういうカルチャーを台湾に移植しようとしたわけです。

そこから台湾総督ができ、非常に短い期間だったんですけども、桂太郎は2代目の台湾総督となりました。そして、1900年に台湾協会会頭として台湾協会学校を創立して初代校長に就任、以後12年間にわたり本学の基礎をつくったのです。

—— その後、日露戦争の勝

利に貢献した児玉源太郎・台湾総督下で開拓を担う民政長官に後藤新平（のちの第3代拓大学長）がなつたと。

**福田** ええ。拓殖大学ができたのが、いわば台湾総督民政部と、そこから帰つて来た人たちが台湾協会というのを民間でつくつて、その民間の台湾協会のトップに桂太郎がなつて、台湾

の現地と日本を結び、交流をよりよく推し進めようとしていつた。つまり、今で言う民間のNGO（非政府組織）ですよ。

その時は三井や住友財閥などの財界人もみんな桂さんの応援をして、それでその協会ができた

たわけです。ですから、当初の台湾協会学校というのは、台湾総督府が半分以上、お金を出しているんです。

—— そういう意味で、台湾

の開発にあつて経世済民の思想があり、欧米列強とは違うぞという意気込みが当時の関係者にはあつたということですね。

**福田** ええ。それまで向こう

に行つた人たちは、あまり台湾語も話せない。どちらかというと役人で、あまり優秀じゃない人が行っていたんです。でも、それではいけないと。

現地の言葉が話せて、現地の風土を理解する人材を日本から

送るということで、拓殖大学が外国語を重視する原点になるのです。当時、日本の大学で台湾語の授業があつたのは拓殖大学くらいだと思います。

—— 校歌には「人種の色と

地の境 我が立つ前に差別無し」とあります。当時、白人優位の社会にあつて人種差別撤廃に動いていたクリスチャンの新渡戸稲造（のちの2代目拓殖大学学監）が、国際連盟でも人種差別撤廃に動いた時期ですね。

**福田** そうですね。拓殖大学

の建学の精神は「積極進取の概とあらゆる民族から敬慕されるに値する教養と品格を具えた

有為な人材の育成」です。

112年前に自分たちの先輩が台湾の荒れ地に行つて、治安の悪いところでも命がけで努力して、現地の人と一緒になつて

豊かな社会を築こうとやつてきたわけです。これが拓殖大学のミッションであり、そうした当初の理念と実際にあつた苦労が校歌になつたのだと、われわれは理解しています。

そういう伝統をこれからの学生に引き継いでいくことが必要です。世界のあるあらゆる民族や人種との共存を念頭に置いた真の国際人を育成してまいりたいと思つています。